

## 島袋寛盛：第4回亜熱帯性ホンダワラ属藻類の分類に関するワークショップに参加して

2007年2月22、23日に、鹿児島県水産技術開発センター（以下、鹿児島県水技センター）主催の第4回亜熱帯性ホンダワラ属藻類の分類に関するワークショップ「亜熱帯性ホンダワラ属の分類」が鹿児島県指宿市の同センターにおいて開催された。

鹿児島県は九州南部に位置するふたつの半島と与論島を南端とする多くの離島によって構成され、南北に広がる広大な沿岸域を有している。そのため鹿児島県沿岸は、温帯性から亜熱帯性の海藻が幅広く生育し、県北部を南限とする温帯性のノコギリモク *Sargassum macrocarpum* C. Agardh やヨレモクモドキ *S. yamamotoi* Yoshida, 県南部を北限とする亜熱帯性のタマキレバモク *S. polyporum* Montagne が生育するなど、種多様性の高い海域となっている。また最近では、元来九州沿岸に分布していなかったホンダワラ属藻類の生育が確認されるなど、温暖化に関する分布の変動も問題となっている。鹿児島県水技センターは、鹿児島県に生育するホンダワラ属藻類の現況を把握し、同定に関する知見を共有する目的で、1回目の本ワークショップを2003年10月に開催した。本ワークショップは年1回の間隔で開催されており、筆者も第1回から参加している。回を重ねるごとに参加者の方々が増え、現在では九州とその近隣海域に生育するホンダワラ属の現況と同定を検討するワークショップへ発展した。今回のワークショップでも、九州、四国各県の水産試験場や水産研究所の研究者、藻類に関わる業務に従事しておられる研究者

や技術者など、総勢26名の参加者が集まった。

2日間の日程で行われる本ワークショップの初日は、以下の方々の講演が行われた。

荒武久道（宮崎県水試）：宮崎県南部串間市のガラモ場の変遷

田中敏博（鹿児島水技）：鹿児島湾における藻場の変化とその特異性

新井章吾（海藻研究所）：日本におけるアイゴの利用

新井章吾（同）：タマエダモクやクロキズタなどの暖海性海藻がなぜ温海に飛び地的に生育するのか？

荒武氏の講演では、1976年から現在に至る宮崎県沿岸のホンダワラ藻場の面積と構成種の変化が報告され、藻場面積が約1/10にまで減少したことが指摘された。また、2005年と2006年の調査では、1998年から2001年の調査と比較して、9種（未同定種含む）のホンダワラ属藻類が新たに生育していることが報告された。田中氏の講演では、1978年から現在に至る鹿児島湾のアマモ場・ガラモ場の変化が説明された。鹿児島湾内に形成されているガラモ場は、本州の内湾域に一般的に見られるようなヤツタモク *S. patens* C. Agardh やマメタワラ *S. piluliferum* (Turner) C. Agardh, ヒジキ *S. fusiforme* (Harvey) Setchell が主な構成種となっている。約30年の間に、一部の海域を除いて、ガラモ場面積は減少傾向にあるとの報告だった。また湾奥部や湾口部では、今まで報告のなかった亜熱帯性のホンダワラ属藻類の小規模な藻場が点在しているとのことだった。以上から、九州東岸から鹿児島



ワークショップ参加者及び演者：荒武久道氏（最後列、左から5番目）、田中敏博氏（前列、左から1番目）、新井章吾氏（前列、右から2番目）、筆者（最後列、右端）



ホンダワラ属標本の検討風景

島湾にかけてのガラモ場の面積は全体的に減少の傾向にあるが、亜熱帯性ホンダワラ属藻類は増加傾向であることがわかった。本海域は黒潮の影響を受けているため、流動や水温の変化により新たなホンダワラ属が移入しつつある可能性がある。調査精度や同定技術の向上による種数増加も考えられるため、今後さらに調査を継続していくことが大切であると感じた。

西日本または南日本沿岸での藻場減少要因のひとつにアイゴなどによる藻食性魚類の食害が指摘されている。新井氏の講演では、アイゴの漁獲を促進させ、食用として利用する方法や実例が説明された。沖縄県や鹿児島県ではアイゴが鮮魚として流通し、徳島県や和歌山県では干物などの加工品が流通している。しかし、その他の地域では単価が安く魚体が丁寧に扱われないために商品価値が低い状況であった。最近では、漁獲後すぐに処理することにより刺身用として商品価値を高めて出荷している地域もあるなど、有効利用しようとする試みも各地で始めている。アイゴ類の食害は西日本における藻場減少要因のひとつと考えられているが、アイゴが漁業の対象となって継続的に漁獲されるようになると、藻場の減

少傾向に何らかの変化が見られれば非常に興味深いと思った。

2日目は、高知県、長崎県、宮崎県の水産試験研究機関と鹿児島県水技センターの標本を用いて、区別の難しいいくつかの種類についての検討を行った。特に今回は、コナフキモク *S. glaucescens* J. Agardh やシマウラモク *S. incanum* Grunow など、九州沿岸に分布しながらも報告が少ない種類について、形態や同定のポイントを議論した。筆者も種を区別するための形質について意見交換をさせていただいた。

鹿児島を中心に始まったワークショップであるが、4回目となった今回までに、九州、四国沿岸に分布するホンダワラ属藻類についての現状をおおむね把握できるようになった。この海域は海藻の種多様性が高く、魚介類資源を維持する点でもガラモ場の存在は重要である。今後、本ワークショップが多くの情報を発信できるようになることを期待し、私も微力ながらお役に立てればと思う。

参加者氏名（五十音順・敬称略）：新井章吾（海藻研究所）、荒武久道（宮崎県水試）、今吉雄二（鹿児島県水技）、今村昭則（鹿児島県水技）、大石直樹（阿久根市栽培セ）、太田光紀（海洋プランニング）、神崎博幸（佐賀県玄海水振セ）、清本節夫（西海区水研）、桐山隆哉（長崎県水試）、黒木善之（熊本県水研）、古賀吾一（鹿児島県水技）、佐島圭一郎（宮崎県水試）、鳥袋寛盛（鹿大水）、新村 巖（元鹿児島県水試）、田中幸記（黒潮生物研究所）、田中敏博（鹿児島県水技）、田野井清也（高知県水試）、寺田竜太（鹿大水）、中嶋 泰（オフィス MOBA）、永田昭廣（滄海生物環境サポート）、野呂忠秀（鹿大水）、増田雄二（熊本県水研）、吉田吾郎（瀬戸内水研）、吉田忠生（元北大）、吉満 敏（鹿児島県水技）、渡辺耕平（西日本オーシャンリサーチ）

（鹿児島大学水産学部附属海洋資源環境教育研究センター、現在の所属：千葉大学大学院理学研究科）



**タマバロニア水槽？** このワークショップも4回目を数え、多くの参加者により有意義な研修・意見交換の場になっているようです。しかし、端から見ると…。

「葉っぱ1枚を手にとって、うれしそにニ

タニタ話してるあの人たちって変じゃない？」とはうちのアルバイトの言葉。やっぱり皆さん好きなんですねー。私もその一員ですが…。ワークショップ終了後、鹿児島県水技センターの見学、私自慢の各種ホンダワラお手入れフリー水槽群（寺脇さんのまね）へ案内し、さあ！説明するか…。と、「おっ！！このタマバロニアの群落はすごい！！」。いきなり人だかりで観察会、「あー それ雑草なんですけど…（涙）。水槽内でタマバロニアの綺麗な群落を作るのは難しいそうです。（鹿児島県水技 田中敏博）

